
大学院商学研究科

修士論文の手引き

Graduate School of
Commerce

GSC

Waseda
University

since 1951

早稲田大学大学院商学研究科

目 次

I. 修士論文の書き方

1. 修士論文とは	3
2. 論文のタイプ	4
3. 主題の選定	4
4. 論文の構成	5
5. 修士論文計画書	7
6. コンピュータの利用	7
7. 文献・資料の調べ方	8
8. 参考文献・資料の引用	10
9. 論文の審査・評価	12

II. 修士論文執筆・提出要領

1. 和文で作成の場合.....	13
2. 英文で作成の場合.....	14
3. 提出方法.....	15

参考資料—私の修士論文—

1. 修士論文におけるテーマ探しと取り組み方 —理論論文のケースを中心に— (2007 年 3 月修了 清水 弘幸)	16
2. 修士課程における論文作成の手順とその実際 (2012 年 3 月修了 高橋 克幸)	20

I. 修士論文の書き方

1. 修士論文とは

修士論文は修士課程での勉学、場合によってはそれまでの大学での勉学の総決算ともいえるべきものを表現する論文であるし、また博士後期課程での研究の出発点ともなるような研究成果である。それは「学生が各自の専攻分野について研究テーマを選定し、研究の成果を組織立て、これを発表することによって、広い視野に立つ精深な学識と専攻分野における研究能力を示すに足るものでなければならない」（「商学研究科要項」）。

商学研究科においては、修士論文は修士課程の修了要件である所定の 32 単位(2013 年度以前入学者の場合は 36 単位)の取得が見込まれる者のみが提出することができる。提出までの一般的なスケジュール（4 月入学者が標準 2 年間で 3 月修了を目指す場合のモデルケース）は以下に示すとおり、2 年次の 1 月に提出期限が設定されているが、延長生となり、3 年次以降の 9 月修了を希望する場合は、当該年度の 7 月に修士論文を提出することになる。修士論文の提出期限は厳守しなければならない。提出期限までに修士論文を完成させるには、早目に修士論文作成の作業にとりかかることが不可欠である。それは長い作業プロセスを意味するわけであって、相当の準備が必要だからである。提出期限の 1 年以上前から、具体的な準備をしなければならないであろう。あとでふれる「修士論文計画書」の提出期限は、例年 2 セメスター次の 1 月(7 月)であるから、そのときまでに修士論文の「主題」と「概要」はまとめておく必要がある。

具体的な日程の詳細は、商学研究科要項の商学研究科暦下部の【修士論文スケジュール】を参照されたい。また、最新版のスケジュールについては商学研究科ホームページを参照のこと。

【修士論文作成にかかるスケジュール】※4 月入学者の場合

●修士 1 年

- 4 月 「修士論文の手引き」配付
- 4-9 月 「学術・研究公正概論（人文・社会科学系）」（GEC 設置科目）履修 または日本学術振興会研究倫理 e ラーニングコース（e-Learning Course on Research Ethics）「eL CoRE」（大学院生向けコース）受講
- 12 月 修士論文仮指導（論文計画書作成指導、審査員 3 名(副査 2 名含む)の選定)
- 1 月 修士論文計画書提出（題目案、審査員 3 名、研究計画概要の決定）
研究倫理に関するプログラム 受講報告書（申請フォーム）提出
※学部在籍中に GEC 設置科目を履修・合格した者は、そのことが確認できる成績証明書も提出。学外プログラムを修了した者は、修了証書（PDF）も提出

●修士 2 年

- 11 月 修士論文副査指導期間（進捗状況の報告、完成までのスケジュール確認）
修士論文提出予定届け出
- 1 月 修士論文提出、修士論文口述試験
- 3 月 修士論文可否判定

2. 論文のタイプ

まず、自らの修士論文が論文としていかなるタイプないしジャンルに属するかを、決めることが大切である。論文のタイプは、通常、**実証論文**と**レビュー論文**に分けられる。経営学の分野でいえば、実証論文は *Academy of Management Journal* に掲載されているような論文であり、レビュー論文は *Academy of Management Review* に掲載されているような論文である。

実証論文は、実験を行ったり、質問票によりデータを回収したり、ケース・スタディを試みたり、二次データを大量に使って発見した経験事実について議論するものである。実証研究は、大量のサンプルによる**定量的研究**と少数の事例による詳細な**ケース・スタディ**に分類される。前者は、従来の理論的知識から演繹的に仮説を立てて、実際に測定可能な操作仮説を構築して検証を行う**仮説検証型**の研究である。後者は、少数の事例に焦点をあてて、より詳細にデータや情報を収集し、ある問題に対する理解を深め、新たな仮説を生み出していこうという**仮説構築型**の研究である。ケース・スタディの目的は、逸脱事例を手がかりとし、仮説を構築し、一般的な原理・法則にまで高めることにある。ケース・スタディは、あくまで仮説構築のために使われるものであって、仮説検証には使えないことに留意する必要がある。

レビュー論文はいわゆる書評のことではなく、既刊の諸文献を組織だて、統合し、評価するなかで、問題を明確にしたり、矛盾やギャップを発見したりして、問題解決のステップを示唆することを目的としている。レビュー論文では、特定の問題に関する理論の発展を跡づけたり、あるいは見きわめることによって、理論を拡大したり、精練化することを目的としている。通常は、新たな仮説や理論を提示することになる。もっとも、場合によっては、既存の理論を分析して、自己矛盾がないかどうか、理論と経験的観察のあいだにギャップがないか否かを検討することによって、ある理論が他より優れているといった主張をすることもある。

3. 主題の選定

修士論文作成上、主題（テーマ）の選定はきわめて重要であるので、それには慎重な対応が必要であり、自ら時間をかけて熟慮し、また指導教員の指導を受け、さらに先輩等にも相談するのがよい。主題を確定することによって、修士論文作成はひとつの山をこえることになるだろう。ただし、構成を練る段階や、文献をレビューしたり、リサーチ・デザインを設定するプロセスにおいて、主題を修正しなければならない場合も生じ得る。修士論文の作成プロセスには、そうしたフィードバックが随伴し得ることを、あらかじめ念頭に置いたほうがよい。

主題については自分の専攻分野において、とくに興味がある問題を選ぶ。興味は主題を

追求する作業のなかで倍加するかもしれない。興味こそが主題の追求の衝動になる。しかし、論文を展開しうるのに必要な資料、文献などといった研究素材があるかどうか、またそうした研究素材に接近できるかどうかをチェックする必要がある。同時に自らの研究能力、調査能力も考えに入れなければならない。修士論文であるからには、問題や研究をよく理解し、分析したうえで、多少の自分なりの独創性を打ち出した記述をしなければならないが、そうしたことについて成算がなければならない。

ちなみに、主題に関する過去から現在までの研究状況をよく把握しておくことも大切であって、先覚者が選択したのと類似した見地、方法で、同じ主題を取り上げても意味がないであろう。主題に対する自らの態度が、これまでの研究態度、研究史とどのようなコンテキストにおいて独自であるかを自覚しておくことは大切である。そしておそらく、主題に関する研究史のなかでの自分の修士論文の位置づけは、あとでふれるように、その必要な記載事項になる。

したがって、あまり大きな問題を主題として選ぶのは望ましくない。大きな問題を取り上げるとなると、相当の知見、学識が必要となるからであるし、また大きな問題に対し独創的な発言、提案をするのはむずかしいからである。なかには、大きな問題を選んで教科書ふうに書き上げる論文がみられるが、これは全くよくない。もっとも、大きな問題を、観点をしぼり、限定的に取り上げる場合には問題はない。そうした場合には、主題を限定的に表す必要があるし、あるいは副題を付するのもよい。

主題は大きくてもよくないし、あまりに小さいのも問題である。しかし、一見小さい問題のようでも、手掛けてみると、奥行きが深く、分野が広がってくることが多い。理学系の分野での修士論文の主題ほどに限定的ではないにしても、限定的であることを心掛けたほうがよいし、とりわけ実証論文の場合はそうである。

4. 論文の構成

主題を確定するプロセスにおいて、おそらく同時並行的に、主題を展開するシナリオ(筋書)づくりも進行するはずである。つまり、修士論文の組み立てを考えることである。それは、実証論文であるか、それともレビュー論文であるかによって異なる。

仮説検証型の実証論文は、典型的には、序論、方法、結果および議論という4つの部分から構成される。ただし、このような構成は実証論文の典型を述べたものであって、研究分野や研究目的によって若干の変形が生じるだろう。また、序論、方法、結果および議論といった用語をそのまま各章の見出しに使う必要はない。むしろ、各章の内容を適切に表すものを見出しとして用いるほうが望ましい。

序論 主題として取り上げようとする問題の発展状況について述べ、自らの実証研究の意図、目的とその論拠、研究戦略(方針)、期待する成果を記述する。とりわけ、仮説を

示し、自分が期待する研究の理論的含意を明確にすることが大切である。

方法 自らの実証研究で使う方法をあきらかにする。まず、調査対象、その属性等にふれることになる。つぎに、選択した調査方法をあきらかにする。

調査方法を使った研究としては、すでにふれたように、実験室実験、質問票による方法、面接・聴き取り、一次資料を大いに使ったの研究などをあげることができる。これらの方法には長短があり、方法の選択は研究の目的、研究素材によって決めなければならない、そうしたことがここでは述べられる。さらに、ここでは、これらの方法がどのような手順で実施されたかも述べなければならない。

結果 見出された結果について報告する。収集されたデータの処理の仕方、場合によっては、その統計的処理について要約することが必要である。まず主要な結果ないし発見を簡潔に述べる。ついで、結論を正当化するのに十分に詳細な程度にデータを報告する。その場合、明瞭かつ経済的にデータを報告するために、表や図を使うことが望ましい。また、統計結果を報告する場合、得られたテスト値（たとえば、 t -値、 F -値）、自由度、確率レベルおよび効果の方向、ならびに記述統計（たとえば、平均値、標準偏差）を含む必要がある。さらに、特定のテストの適切性に問題がある場合には、そのテストの使用を正当化しなければならない。

議論 結果の解釈、意味するところ（implication）を論じる。とりわけ当初の仮説との関連から、得られた結果を評価し、解釈するのが大切である。その際、結果の理論的帰結および結論の妥当性を強調する必要がある。まず、結果が仮説を支持するか否かについて簡潔に述べるのがよい。ついで、結論を明確にし、確証するために、当該研究の結果と他の研究者による研究の結果との類似点および相違点を述べる。そして、当該研究の理論上および実践上の意義を述べたり、当該研究で改善の余地のある箇所を指摘したり、新しい研究方向を示唆したりすることも適切である。いずれにしても、当該研究が貢献したことは何か、当該研究は当初の問題を解決するためにどのように役立ったのか、当該研究からどのような結論および理論的示唆を導き出すことができたのか、といったことを示すことが重要である。

仮説構築型の実証論文、すなわちケース・スタディの場合も、通常は、序論、方法、結果および議論という4つの部分から構成される。ただし、仮説の提示が最初になされる仮説検証型の実証論文とは異なり、新たな概念やモデルが論文の最後に提示されなくてはならない。ケース・スタディの目的は、将来の研究に用いることのできる十分に定義された概念やモデルを最終的に提示することにあるからである。「序論」では、どのような問題を明らかにしたいのかという研究課題、なぜケース・スタディという研究方法を選んだのかということなどを示す必要がある。仮説検証型の実証論文と異なり、仮説の提示は「序論」では行わない。「方法」では、単一ケースか複数ケースかといったリサーチ・デザイン、ケースの選別方法とその正当化、データの収集方法と分析方法などについて述べる必

要がある。ケースの選別方法は、それによってケース・スタディの成否が決まることが多いので、特に重要である。「結果」では、発見したことを記述的および分析的に示す必要がある。特に、「結果」に関しては、発見内容を適切に表すものを見出しとして用いるほうが望ましい。「議論」では、これまでの理論からの逸脱事例を手がかりとするなどして、新たな仮説を提示する。

レビュー論文の場合には、仮説検証型の実証論文のような典型的スタイルはない。だが、序章において、主題を説明することが必要である。つまり、研究の意図、目的とその論拠、研究戦略、期待する成果を記述する。おそらく、これらとの関連において、今日までの当問題に関する研究状況が説明されなければなるまい。そして、後続の諸章において、「既刊の諸文献を組織立て、統合し、評価する」こと、または「理論の発展を跡づけ、あるいは見きわめて、理論を拡大したり、精練化する」試みが展開されることになるだろう。そして、結章を必ず設けて、自分なりの評価なり、「新理論の提示」についての総括をしなければならない。また、レビュー論文の章立ては、既存研究を発生史的に並べるのではなくて、既存研究間の関係によって並べることが一般的である。

論文の構成・論文の書き方については多くの文献がある。図書館や書店で確認し、参考にすることが望ましい。

文章については、以下の本が広く読まれている。

木下是雄(1981)『理科系の作文技術』中公新書、中央公論新社

仮説検証型の論文の作成については、以下の本が参考になる。

久保克行(2021)『経営学のための統計学・データ分析』東洋経済新報社

5. 修士論文計画書

修士論文を提出しようとする者は、修士2セメスター次の所定の期日までに、所定の「修士論文計画書」を事務所宛に提出しなければならない。計画書では、「修士論文の主題」、「論文内容の概要」、「参考文献」を記入する。したがって、修士論文計画書の提出期日までに、修士論文の主題を決め、論文の大略のシナリオ、骨子をまとめておく必要がある。

修士論文計画書には指導教員（主査）と、2名の副審査員（副査）の承認が必要である。そこで、記載内容に関して指導教員の指導を受けなければならない。おそらく修士論文計画書に記載する主題と概要を、演習等の場において報告し、指導教員ばかりでなく、先輩、友人などから助言を得ることになるだろう。こうした機会は1回のみならず、数回にわたるかもしれない。

ちなみに、あとでふれる2名の副査はこの修士論文計画書の内容にもとづき決定される。

副査からも論文作成について、指導を受ける必要がある。

6. 統計的な手法とコンピュータの利用

修士論文を作成するにあたりコンピュータの利用は不可欠である。特に統計的な手法を用いた修士論文の作成にあたっては、標準的な統計学および計量経済学の知識が不可欠となる。また、定量的な分析を行わない場合でも、定量的な分析を理解する必要がある。授業や自分の学習を通じて身につけることが望ましい。例えば、以下の教科書にあるような内容を身につけることが望ましい。

黒住英司(2016)『計量経済学 (サピエンティア)』東洋経済新報社

田中隆一(2015)『計量経済学の第一歩 実証分析のススメ (有斐閣ストゥディア)』有斐閣

山本拓(1995)『計量経済学』新世社

森田果(2014)『実証分析入門 データから「因果関係」を読み解く作法』日本評論社

山本勲 (2015)『実証分析のための計量経済学』中央経済社

Stock, J., and M. Watson (2014) Introduction to Econometrics updated third edition, Pearson Education、

ストック・ジェームス、マーク・ワトソン著、宮尾龍蔵訳(2016)『入門 計量経済学』共立出版

Jeffrey M. Woodridge (2015) Introductory econometrics: A modern approach 6th edition South-Western Pub.

データ分析を行う際に統計ソフトウェアを使用する必要がある。統計ソフトウェアの代表的なものとしてはStata, SPSSや無料の統計ソフトウェアパッケージRがよく用いられている。2023年8月現在、早稲田大学の学生は自らのコンピュータにStata および SPSS をインストールすることが可能である。これらのソフトウェアや無料の統計ソフトウェアパッケージRを用いて分析を行う能力を身につける必要がある。授業や以下の教科書等を通じて身につけることが望ましい。

星野匡郎, 田中久稔(2023)『Rによる実証分析 (第2版) —回帰分析から因果分析へ—』オーム社

松浦寿幸 (2021)『Stataによるデータ分析入門 第3版 経済分析の基礎から因果推論まで』東京図書

7. 文献・資料の調べ方

文献や資料を探す場合は、①必要な資料を特定する、②所蔵館や配架場所を確認する、③資料を入手する、という流れが一般的であるが、オンラインで入手できる電子資料も増えている。

中央図書館をはじめとする早稲田大学の図書館・図書室には豊富な書籍、一般雑誌、学術雑誌等が所蔵されており、必要な資料の多くは学内で入手可能である。コピーや貸し出しなどのサービスを利用することができる。図書館を利用する際は、学生証を持参する必要がある。早稲田大学が契約している電子資料（電子ブック、電子ジャーナル、各種データベース等）は、学内ネットワークに接続している端末からアクセスして利用することができ、全文データをダウンロードできる論文も多数含まれている。

早稲田大学図書館のディスカバリーサービス「WINE」では、学内の所蔵資料と電子資料を一度に検索することができる[(1)を参照]。WINEの機能やサービスを最大限に活用するために、MyWasedaのIDでWINEにログインしてから検索することを薦める。

書籍、雑誌、論文などの個々のタイトルではなく、早稲田大学が契約しているデータベースや電子資料コレクションを探したい場合は、「学術情報検索」サイトで検索する[(2)を参照]。各データベースにログインする前に、「同時アクセス数」や「学外アクセスの可否」等の利用条件を確認しよう。一部の電子資料は、「学外アクセス」サービスを通して自宅等からもアクセス可能である。

早稲田大学の図書館に所蔵されていない、もしくは契約電子ジャーナルから入手できない論文や資料に関しては、他の大学図書館等から取り寄せてもらうことも可能である。中央図書館2階のレファレンスカウンターで相談・申し込みができる。その際には、論文・資料のタイトル、著者名、掲載雑誌名、号、掲載ページ等の情報が必要になるため、事前に記事索引データベース等でそれらの情報を調べておく必要がある。取り寄せられないものについては、①どの大学の図書館に所蔵されているかを確認し、②中央図書館で紹介状を書いてもらい、③訪問する、という流れになる（提携している慶應義塾大学、一橋大学の図書館に関しては、学生証を提示することで直接入館が可能である）。

中央図書館2階のレファレンスカウンターでは、資料に関する相談ができる。資料の所在が分からない、文献の探し方がわからないといった場合は、積極的に相談してほしい。MyWasedaの「研究」タグを選ぶと右側に表示される「図書館申請フォーム」でも、紹介状の発行、資料取り寄せ、購入希望、資料に関する相談などを申し込むことができる。

以下に、学内で利用できるデータベースやツールを紹介する。

(1)WINE <https://waseda.primo.exlibrisgroup.com/>

早稲田大学図書館が所蔵する資料の書誌情報と所蔵情報（図書、雑誌など）と大学が契約している電子資料やオープンアクセスの電子資料を一度に調べることができる。その他、

雑誌に掲載された論文や記事の情報、事典データベースのコンテンツや外国語新聞の記事、慶應義塾大学図書館の書誌情報と所蔵情報など、幅広い検索が可能。

(2)学術情報検索 <https://waseda-jp.libguides.com/imas>

早稲田大学で契約している電子資料（データベース・電子ジャーナル・電子ブック）や図書館員が選んだ有用な Web サイトなどの学術資源が登録されている。「おすすめのデータベース」から選択、あるいは、名称、分野、資料タイプなどで検索して、利用する。

- ・ 書誌・抄録・索引：CiNii Articles, Web of Science, Scopus, J DreamIII など
- ・ 雑誌論文・記事：ABI/INFORM Complete, Business Source Premier など
- ・ 企業情報：日経バリューサーチ, 日経 NEEDS-FinancialQUEST, eol, OSIRIS など
- ・ 新聞記事：日経テレコン 21, 聞蔵 II ビジュアル, ヨミダス歴史館, 毎索 など

(3)商学研究図書室（11 号館 10 階）の端末のみで利用できるデータベース

※「学術情報検索」には登録されていないため、図書室のカウンターにあるデータベースリストを参照のこと。

Astra Manager, SPEEDA, Capital IQ, Eikon+Datastream など

(4)修士論文の閲覧（商学研究図書室で利用申込）

商学大学院の研究科に在籍する学生は、商学研究科・会計研究科・経営管理研究科の過年度の修士論文を閲覧できる（貸出・複写・印刷・ダウンロードは不可）

※詳しくは、以下のサイトを参照：「早稲田大学修士論文を利用する」

https://waseda-jp.libguides.com/research-navi/diss_master/jp

(5)文献管理ツール（RefWorks、Mendeley）

オンラインで、効率よく、文献情報の管理や参考文献リストの作成ができる。

文献資料やデータベースの知識は修士論文作成において不可欠である。Moodle 上の図書館提供コンテンツ等の情報等で、どのようなデータや情報が利用可能かについて理解することが望ましい。

8. 参考文献・資料の引用

修士論文を書くとき、他人の文献を引用することが必要となる。引用の際に注意すべき点は、本文中での引用部分とその出処を明らかにすることである。

引用部分の出処を示す方法をしては、次の①または②の方法がもっとも多く使用されている。

- ① 引用文献の筆署名、発表年および該当ページを本文中で[]内に示し（分野によっては（ ）内に示す方法もある）、論文の最後に本文中で引用した参考文献のリストをつける方法。

例：本文中 …である [Beaver 1981b, p. 15; 伊藤訳, 1986, p. 18]。

……。Watts and Zimmerman [1978, p.15] は、……

参考文献リストは、第一筆署名のアルファベット順に示す。欧文文献の第一筆署名は、「姓 (family name; surname)」「名」の順に記載し、「姓」と「名」との間に「, (カンマ)」と半角スペースを入れる。二番目以降の筆署名は、「名」「姓」の順に示し、「名」と「姓」との間は半角スペースのみで「, (カンマ)」は記入しない。「名 (given name および middle name)」は、頭文字のあとに「. (ピリオド)」と半角スペースのみで示してもよい。なお、欧文文献と日本語文献とを区分して示す場合は、日本語文献を第一筆署名の「姓」「名」の 50 音順に示す。基本的に記載する出版データは、おおむね以下のとおりである。

論文の場合

筆署名、発表年、論文タイトル、掲載誌名、巻号、論文掲載の最初の頁と最後の頁。

著書の場合

筆署名、発表年、書名、出版地：出版社（者）。

（出版地は、出版社（者）の所在地を都市名とアメリカの州名を記載する。州名は、United States Postal Service のアルファベット 2 文字の略号で書く。アメリカ以外の国の都市は、必要に応じて国名を書く。なお、日本語文献の出版地は省略することが多い）

<参考文献リストの例>

(1) 委員会報告書とその邦訳書

American Accounting Association, 1966. *A Statement of Basic Accounting Theory*. Evanston, IL: American Accounting Association（飯野利夫訳, 1969『アメリカ会計学会・基礎的会計理論』国元書房）。

(2) 同一筆署名の文献が同じ発行年に複数ある場合、発行年の後に a, b, …をつける

Beaver, W. H., 1981a. Econometric Properties of Alternative Security Return Methods. *Journal of Accounting Research*, 19(1), pp.163-184.

——, 1981b. *Financial Reporting: An Accounting Revolution*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall（伊藤邦夫訳, 1986『財務報告書革命』白桃書房）。

(3) 単行本（英文）の第 2 版

Foster, G., 1986. *Financial Statement Analysis* (2nd ed.). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

(4) 学会編の単行本の中にある論文、筆者 3 人

石塚博司・佐藤絃光・竹本達広, 1980「利益予測情報と株式市場」日本経営財務

研究学会編『企業評価と経営財務』中央経済社, pp.142-164。

(5) 単行本の中の論文 (英文)

Kaplan, R. S., 1978. The Information Content of Financial Accounting Numbers: A Survey of Empirical Evidence. In R. A. Abdel-Khalic and T. Keller (eds.), *Impact of Accounting Research on Practice and Disclosure*, Durham, NC: Duke University Press, pp. 134-173.

(6) 雑誌論文 (和文)

染谷恭次郎, 1982 「会計学上の利子概念」『早稲田商学』第 297 号, pp.19-39。

(7) 単行本 (和文)

染谷恭次郎, 1983 『財務諸表三本化の理論』国元書房。

(8) 雑誌論文 (英文) の筆者 2 人

Watts, R. L. and J. L. Zimmerman, 1978. Towards a Positive Theory of the Determination of Accounting Standards. *The Accounting Review*, 53(1), pp.112-134.

- ② 本文中では注番号を示し、そのページの下に区切って脚注をつけるか、あるいは各章の終りまたは論文の終りに後注をつける方法。

例：本文中 …である⁽¹⁾。

Watts and Zimmerman⁽²⁾では、……

脚注／ (1) W. Beaver, *Financial Reporting: An Accounting Revolution*,
後注 Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1981, p.15 (伊藤邦夫訳『財務報告革命』白桃書房, 1986, p.18) .

(2) R. L. Watts and J. L. Zimmerman, “Toward a Positive Theory of the Determination of Accounting Standards,” *The Accounting Review*, Vol. 53(1), p. 115.

社会科学の場合、最近では、①の方法が圧倒的に多く使われている。①の方法の詳細については、アメリカ心理学会 (American Psychological Association: APA) の『論文作成マニュアル』を参照してもらいたい。とりわけ本書は、昨今の電子媒体によるデータの引用・記載方法などについても詳しく説明している。

American Psychological Association, 2020. *Publication Manual* (7th ed.). Washington, D.C.: American Psychological Association.

前田樹海・江藤裕之・田中建彦訳, 2011 『APA 論文作成マニュアル』第 2 版, 医学書院 (American Psychological Association, 2010. *Publication Manual* (6th ed.). Washington, D.C.: American Psychological Association の邦訳)。

また、自分の専門分野のジャーナルへ論文を寄稿する際に要求される形式規定を参考にすればよい。例えば、経営学の場合、アメリカ経営学会 (Academy of Management) の機関誌である *Academy of Management Journal* または *Academy of Management*

*Review*の毎年2月号に載っている“Style Guide for Authors”などがある。なお、日本語の参考文献の記載のしかたについては、自分の専門分野の国内各学会が発行する学会誌の投稿規定が参考になる。

修士論文では、様々な情報源から参考文献・資料を引用・参照するが、修士論文提出者自身が参考文献リストの記載方法を統一して示さなければならないことに注意する。

※修士論文執筆にあたっては、商学研究科要項掲載の「学術的文章における引用」を必ず参照すること。

※早稲田大学学術研究倫理憲章および学術研究倫理に係るガイドラインを遵守すること。

<http://www.waseda.jp/inst/ore/rules/>

9. 論文の審査・評価

修士論文の審査は、指導教員のほかに、2名の副査の教員によって慎重におこなわれる。一般の著書・論文の評価と同じように、修士論文のそれは、形式上の要件についてのチェックと、内容の評価の2つから成り立っている。前者では、論文の構成が適切であるか、文献の列挙の仕方が正しいか、記述が文章の体をなしているか、誤字はないかなどがチェックされる。修士論文が形式上の要件に適っていることも重要である。内容の評価は一般論として述べることはむずかしい。だが、一般的には、テーマが適切かどうか、理論が存在するかどうか、先行研究のレビューが十分かどうか、調査方法が妥当かどうか(内部妥当性が確保されるようリサーチ・デザイン、測定尺度の信頼性・妥当性、サンプリング、データ処理の正しさなど)、論理の一貫性、独創性などが評価のポイントとなるだろう。特に、理論が存在するかどうかは最も重要である。理論の役割は、変数間になぜそのような関係が存在するかを説明することにある。理論がなければ、なぜその変数について研究するのかを正当化する根拠は存在し得ない。提出前に設定される副査指導期間においては、提出前に、その時点までに書き上げた修士論文について指導教員のみならず副査2名にも指導をあおぎ、余裕をもって提出できるよう提出物の完成を目指す。副査指導期間終了後には、修士論文提出予定について届け出ることとし、その後定められた期間内に、修士論文のファイルおよびデータを提出する。提出された修士論文に基づき、口述試験が行われる。

審査員による修士論文の評価は以下の基準により行なわれる。総合評価がCの場合は不合格となる(成績照会画面ではFとして表示される)。

A+=特に優れているもの

A=優れているもの

B=普通のもの

C=劣るもの(成績照会画面ではFとして表示される)

必要によっては、審査後指導教員から論文の総合評価ならびに今後の研究方向・方法な

どについてご意見をいただくよう心掛けることは、自己の研究を推進する上で大いに役に立つだろう。

修士（商学）学位申請論文 審査評価基準

1. 論文の内容において独自性が見られること。
2. 論文に関連する学問領域を的確にサーベイしていること。
3. 論旨の展開が、体系的・論理的で説得力があること。
4. 実証的な内容を含む論文の場合、学術研究としての方法論に則っているとみなされること。
5. 文献の引用方法、注の付け方などの面で、学術論文としての形式的要件を備えていること。
6. 早稲田大学学術研究倫理憲章および学術研究倫理に係るガイドラインを遵守していること*。

*早稲田大学学術研究倫理憲章および学術研究倫理に係るガイドラインについての詳細は、以下のURLよりご参照ください。

<https://www.waseda.jp/inst/ore/rules/>

Ⅱ. 修士論文執筆・提出要領

1. 和文で作成の場合

書式設定 (MS Word 等のソフトなどを使用して印字したものとする。)

用紙サイズ：A4版・縦方向

文字方向：横書き

文字数・行数：40字×30行（1頁1200字）

印刷形式：片面印刷

余白：上30mm、下35mm、左35mm、右20mm

製本スタイル：左綴じ

サイズ・フォント

印字サイズ・フォント等は自由だが、一応の目安を示す。

＜本文(注・参考文献含む)＞

()内は英文の場合のフォント

区分	サイズ・フォント	配置
目次	11～20ポイント／明朝 (Times New Roman)	左寄せ
本文	11ポイント／明朝 (Times New Roman)	左寄せ
章	20ポイント／ゴシック (Arial)	センタリング
節	14ポイント／ゴシック (Arial)	左寄せ
項	12ポイント／ゴシック (Arial)	左寄せ
注・参考文献	10ポイント／明朝 (Times New Roman)	左寄せ
注・参考文献見出し	10ポイント／ゴシック (Arial)	左寄せ

＜図表＞

区分	サイズ・フォント	配置
見出し	10ポイント／ゴシック (Arial)	センタリング
データ	10ポイント／明朝 (Times New Roman)	自由
注・出所	9ポイント／明朝 (Times New Roman)	左寄せ
単位等	9ポイント／明朝 (Times New Roman)	自由

注) 図表のサイズにあわせて適宜調整のこと。

概要書

目次の前に同様の書式で2,000～3,000字程度（2～3枚程度）の概要書をつけること。

目次

本文に先立ち、目次をつけること。

頁番号

中央下部に頁番号を記載すること。概要書および目次の頁番号とは区分し、本文の1頁目の頁番号を「1」とすること。
(頁数の規定はないが、指導教員と相談すること。)

注の表記

脚注形式、後注形式のいずれも可とする。

参考文献・資料の引用

本手引き pp.10-12 を参照すること。

2. 英文で作成の場合

英文での作成の場合は、事前に指導教員の承認を得ること。
日本語による修士論文概要書（6,000字以上）の添付を必須とする。

書式設定（MS Word等のソフトなどを使用して印字したものとする。）

用紙サイズ：A4版・縦方向
文字方向：横書き
行数：30行（1頁500～700 word程度）
印刷形式：片面印刷
余白：上30mm、下35mm、左35mm、右20mm
製本スタイル：左綴じ

サイズ・フォント

印字サイズ・フォント等は自由だが、一応の目安を示す。
＜本文（注・参考文献含む）＞

区分	サイズ・フォント	配置
目次	11～20ポイント／Times New Roman	左寄せ
本文	11ポイント／Times New Roman	左寄せ
章	20ポイント／Arial	センタリング
節	14ポイント／Arial	左寄せ
項	12ポイント／Arial	左寄せ
注・参考文献	10ポイント／Times New Roman	左寄せ
注・参考文献見出し	10ポイント／Arial	左寄せ

＜図表＞

区分	サイズ・フォント	配置
見出し	10ポイント／Arial	センタリング
データ	10ポイント／Times New Roman	自由
注・出所	9ポイント／Times New Roman	左寄せ
単位等	9ポイント／Times New Roman	自由

注）図表のサイズにあわせて適宜調整のこと。

概要書 目次の前に同様の書式で6,000字以上の日本語の概要書をつけること。

目次 本文に先立ち、目次をつけること。

頁番号 中央下部に頁番号を記載すること。概要書および目次の頁番号とは区分し、本文の1頁目の頁番号を「1」とすること。
（頁数の規定はないが、指導教員と相談すること。）

注の表記 脚注形式、後注形式のいずれも可とする。

参考文献・資料の引用 本手引き pp.10-12 を参照すること。

3. 提出方法

提出物

- ・修士論文 および 審査依頼書：計3部（正1部・副2部）
- ・審査所見書：計3部
- ・リポジトリ登録申請書 兼 公開許諾書：1枚
- ・修士論文デジタルデータ（PDF）：1部

修士論文の提出方法

- ①論文本体をA4・片面にて3部出力する
概要書、目次、本文の順にそろえること
- ②表紙（A4）を3部出力し、それぞれを論文本体各部の先頭につける
必要事項を入力すること。また、表紙冒頭の赤字部分を黒字に修正すること。
- ③表紙・論文本体1部ずつに2穴パンチで穴をあける
穴の位置・奥行き等注意到意
- ④表紙・論文本体1を市販の紙ファイルに綴じこむ
正1部・副2部を作成のこと
- ⑤審査依頼書（A5サイズ）を各紙ファイルの表紙に貼付
必要事項を入力すること
- ⑥審査所見書（A4サイズ）を紙ファイルと表紙の間に挟む（綴じ込まない）
必要事項（上段・太枠内のみ）を入力すること
- ⑦リポジトリ登録申請書 兼 公開許諾書を添付
必要事項を入力すること
完成論文の題目と、記号を含め一字一句相違ないよう留意すること
副題が必要な場合は、副題の前後に「～」を付すこと
あらかじめ指導教員の署名捺印をうけること
- ⑧デジタルデータを提出
Waseda Moodle 内の所定フォルダに、期限内にPDFデータを提出する
ファイル名：学籍番号_氏名_修士論文_提出日.pdf
詳細は商学研究科ホームページおよび事務所からの案内メール等の指示に従うこと

※所定書式は商学研究科ホームページよりダウンロードすること

※提出前には必ず、スケジュールや提出方法に関する詳細について商学研究科ホームページや商学研究科事務所からの案内を参照すること。

参考資料 —私の修士論文—

1. 修士論文におけるテーマ探しと取り組み方 —理論論文のケースを中心に— 清水 弘幸（しみず ひろゆき）

<プロフィール>

2007年3月大学院商学研究科修士課程修了。早稲田大学商学大学院助手（産業経営研究所助手）を経て、現職は、早稲田大学商学大学院講師（任期付）。2016年7月早稲田大学にて博士（商学）を取得。

学部、修士課程において、私は嶋村紘輝教授（現在は名誉教授）の下で「マクロ経済理論」を中心に学んだ。嶋村先生からは、多くのことを教わったが、特に理論論文の作成の難しさを学んだ。今回は、自分の経験からどのようにテーマを決め、どのような方法で論文を作成したか、またどのような点でつまづいたかを中心に本稿で伝えたいと思う。特に理論論文を考えている人の参考になれば幸いである。本稿では、修士論文作成までの流れを、(1)修士1年目で行いたいこと、(2)テーマ探しとつまづきやすい点、(3)発表の場への積極的参加、(4)指導教員、副査との関わりと相談、(5)論文作成時に気を付けることと修士論文を作成して、の5点に分けて述べていきたい。

(1) 修士1年目で行いたいこと

修士1年目においては、まず論文作成というよりも授業中心となり、そこで新たな知識や方法論の習得を行うのが主な生活スタイルとなる。私の話で恐縮であるが、私は経済学、特に理論を専攻し、その習得に励んできた。私の修士1年目は幸運にも周りに経済理論を専攻する院生が多く、そこで授業以外で互いに多くを学んできた。例えば、授業以外でいろいろなゼミ生の有志が集まり（商学研究科以外からも参加者がいた）、数学ゼミのようなものを作った。そこで、各自割り当てられた命題を証明するという場を週に1、2度のペースで作し、知識の交流を深めていった。

授業で理論や方法論を学び、それを生かした論文を作成するという流れはもちろん大事であるが、この時期は、それ以外に、他の院生と積極的に意見交換し、学ぶ場を作ることには非常に有益に思う。それは、どうしても授業では受け身の形で進んでしまうが、自ら積極的に学び習得するものは論文作成において、多くの助けとなるからである。1年目は、何かとやることが多く、時間を割くのにも厳しい面があるかと思うが、ぜひ周りを巻き込んで、勉強する機会を積極的に作ってほしい。

次に、修士1年目で行いたいこととして、学術論文をできるだけ多く、かつ深く読むという習慣を身に付けてほしい。学部生までは教科書が中心となり、学術論文に触れる機会はそれほど多くはなかったかと思われるが、早い段階で多く触れることで、論文の流れや書き方のイメージが掴め易くなる。ただ、注意が必要なのは、表面的に理解することではなく、方法論的にも深く理解することが重要である。今自分にどのような知識が足りないのかなど多く気づかされる良い機会となった。

(2) テーマ探しとつまづきやすい点

修士1年次の1月には、修士論文計画書の提出を求められるが、このとき皆悩むのが、どのような論文テーマを設定するかという点である。やりたいテーマが明確にある人は良いが、どのようにテーマを絞れば良いかという点についてここで触れたい。まず、私の経験談を述べると、いわゆる「something new」をあまりに求めすぎるとつまづく可能性が高くなるということである。もちろん大学院でより高度な知識を学んだ証として、何か新

しいものを生み出したいという気持ちは大いに理解できる。私の場合、1年次で学んだ新しい理論を参考にし、何か新しい発見ができないかという気持ちがとても強かったように思う。ここでは、特に経済理論における論文のケースで考えてみたい。

1年次で学ぶ理論は学部で習うものと比較し、格段に難しくなる。そしてそれらの理論は、非常に洗練され、とても興味深いインプリケーションを与えるのがほとんどであり、一流の研究者から生み出されたものである。まだ当時研究者でもない自分が「something new」をもつ理論論文の作成に着手することは、謙虚さが足りなかったように感じる。もちろん新しいアイデアを理論に組み込み、興味深い結果を与える修士論文は数多く存在するかもしれない。ただし、それを追い求めすぎると先ほど述べたようにテーマ設定でつまづく可能性が高くなる。

ここで重要なのは、何ができて何ができないかをはっきりさせることである。修士論文で重要なのは（個人的には）、修士課程の間で学んだ理論や方法論をしっかり理解できていることを示すことであるように思う。その先で少しでも新しく、興味深いことを示すことができれば言うことはない。理論論文の話が中心になってしまったが、他の分野での論文作成も同様なことが言えるように思う。私の場合は、人々のライフサイクル的な消費行動を既存の理論と、異時点間選好の逆転という概念を取り入れた理論の違いを比較整理し、シミュレーション分析を行うことで、どのような行動の違いが生じるのか、また GDP への影響はどのようになるのかを検討している。

(3) 発表の場への積極的参加

発表の場への積極的参加も、論文のテーマ探しにおいて有益に思う。もちろん同ゼミ内で、何に興味を持っているかなどの意見交換は授業で行われるかもしれないが、異なるゼミ生間での意見交換は重要である。例えば、経済系の先生とゼミ生で現在、経済セミナーが行われている。そこでは、同じ経済系であっても同じ興味や問題意識を持つ人だけではない。様々な観点からどのような経済問題があり、どのような理論、方法論があるのかが多角的に理解できる場となっている。このように、自分が持っている問題意識に対して、違うアプローチの仕方が存在することを発見できる可能性もある。

商学研究科は、会計、経営、マーケティング、金融、経済といった様々な分野が存在する。異なる分野間での交流も論文のテーマ探しにとって活用できると思われるので、できるだけ多くの発表の場に参加してほしい。また、発表を聞くだけでなく、自らが発表できる機会があれば積極的に活用してほしい。他分野の人から質問を受けることで、自分の論文の作成で足りないところや、異なる観点からの解釈なども、確認することができる。

(4) 指導教員と副査との関わりと相談

テーマ探しで悩んでいる際、指導教員と相談するのも大きな手助けとなる。ただし、必要最低限として、何に疑問を感じ、何を明らかにしたいのかは事前に詰めておく必要がある。そのうえで、その道の専門家である指導教員に、どのような研究が存在するのをアドバイスして頂くのも手であろう。また、（指導教員の忙しさによるが）自ら興味がある論文と一緒に読んで頂くことで、修士論文で何ができるかを明確にできる場合もある。この際は、パワーポイントで論文の内容や方法論をまとめ、簡潔に発表できる体制を整えておくとうまいであろう。

副査の先生方との関わりでも、同様なことは言えると思うが、一般的に割いていただける時間は限定的になる可能性がある。その場合、修士論文の進展状況を説明する際、論文の形で持っていくのではなく、パワーポイント等でスライドを作成し、内容に関してのアドバイスを頂くのが効率的で良いと思う。

(5)論文作成時に気を付けることと修士論文を作成して

最後に論文を作成する際に気を付けたいことと、修士論文を作成して感じたことを述べて、本稿を終えたいと思う。いざテーマが絞られ、本格的に調査やモデル構築等に移る前に、サーベイは十分であるか今一度確認してほしい。同じ研究が既に存在しないか、また同じ研究であるとしてもどの点で異なるのかを明確にするために、サーベイは十分すぎるほど行ってほしい。また、過去の研究を整理しまとめることで、その論文の説得力が断然に増す可能性がある。逆にこれを怠ると論文の価値は著しく損なわれるので注意が必要である。

修士論文を作成して感じたことは、学部での卒業論文と比べようもないほど心地よい疲れを得た点である。修士論文では、明確にしたいことを設定したうえで、どのような方法論や理論があり、どれを使えば最適かを際限なく考える。そのうえ、先に述べたようにサーベイの怠りも許されない。このような中で、できれば何か新しい発見を得たいという面もあり、これから作成に取り掛かる修士の方々は、心が折れる時期もあるかもしれない。しかしながら、終えた後は、本当の意味で初めて学術論文を作成したと思うに違いありません。

以下、私の修士論文の目次を記し、本稿を終えたいと思う。この文章に最後までお付き合い頂いた皆様に感謝の意を表します。

<参考>修士論文目次

「指数型・双曲型割引を用いた消費分析」

清水弘幸

はじめに	1
第1章：「割引」に関する考察	2
1-1 「割引」の定義	2
1-2 「割引関数」の形状	4
(A) 指数型割引関数	
(B) 双曲型割引関数	
1-3 「割引関数の数値例」	6
第2章：指数型割引を仮定したライフサイクル仮説	10
2-1 モデルの構築	10
2-2 最適化行動（オイラー方程式の導出）	12
2-3 インプリケーション	13
(A) オイラー方程式の考察	
(B) 効用関数の特定	
2-4 2期間モデル	17
(A) 消費の決定	
(B) 利子率の変化による効果	
第3章：双曲型割引を仮定したライフサイクル仮説	21
3-1 最適化行動を考察する際の問題点（洗練された消費者と単純な消費者）	21
3-2 モデルの構築（洗練された消費者の行動）	23
3-3 最適化行動（オイラー方程式の導出）	24

3-4 インプリケーション	29
(A) オイラー方程式の考察	
(B) 最適消費率 λ の決定	
(C) 有効割引因子 β の計算例	
(D) 消費の異時点間代替の弾力性	
3-5 単純な消費者の行動	36
(A) 実際の消費率 λ の決定	
(B) 消費の異時点間代替の弾力性	
第4章：現在消費偏重 β の消費経路への影響	41
4-1 消費率 λ への影響	43
(A) $\theta = 1$ の場合	
(B) $\theta = 0.5$ の場合	
(C) $\theta = 1.5$ の場合	
4-2 消費経路 C_{t+1}/C_t への影響	48
おわりに	51
付論	53
(1) 動的計画法	53
(2) $((T \rightarrow \infty) \wedge (R = \bar{R})) \Rightarrow \lambda_t \rightarrow \lambda_t^*$ の証明	55
参考文献	57

2. 修士課程における論文作成の手順とその実際

高橋 克幸（たかはし かつゆき）

<プロフィール>

2012 年大学院商学研究科修士課程修了。在学中は「会計情報研究指導」（辻正雄教授）に所属。現職は早稲田大学商学学術院講師（任期付）。担当科目は基礎会計学（商学部）、英書文献研究（商学研究科）など。

修士課程においては基本的に1年間という長い時間をかけて1つの修士論文を作成することになる。ここでは、私の修士論文作成を振り返りながら、修士論文作成の手順を検討する。修士論文のテーマは「サービス業における人的支出の価値関連性」という会計情報の価値関連性を検証したものであった。どのような研究テーマや研究方法であっても、それぞれ苦勞したり、時間がかかったりする箇所があると思うが、私が修士論文を作成する中で、特にそのように思った箇所に着目しながら検討してみたい。

(1) テーマの決定

修士論文を作成するにあたって、まず研究テーマを決定する必要がある。先にも述べたように修士論文は1年間をかけて研究して作成するものであるので、テーマの決定は重要である。そのため、自分の興味、学術的に意義、研究の実行可能性といった様々な基準に照らし合わせて決定する必要がある。自分の興味のあるテーマの候補はいくつかあったが、ゼミで報告する中で、最終的に上述のものに決定した。

修士課程では研究計画書を提出することになっているので、修士論文提出の前年度に単純に「～」をテーマとしてやりたいというのではなく、仮説や研究方法、また主要な参考文献など現時点で分かっていることは具体的に書く必要がある。

研究計画書は、まだ実際に研究を行っていないため、曖昧な表現になってしまう部分も多いが、できるだけ具体的に書かれているほうが、ゼミで発表した時など、研究の妥当性や、今後のスケジュールから考えた研究実行可能性の可否などを判断しやすい。一度テーマを決めて研究を始めると、テーマを変更したくなって、再度テーマを決め直すのは大変で時間も少なくなってしまうので、テーマは慎重に決める必要がある。

テーマが決定したら、順番が前後することもあるが、仮説検証型の実証研究の場合には、先行研究を読み、仮説を設定する。そして、データの取得および分析、最後に論文執筆という手順になる。

仮説を設定する際には、最初はできるだけシンプルな仮説を設定する。その仮説が検証できたら、徐々に仮説を追加して、仮説検証を複雑化させていくといいと思う。提出期限が決まっている修士論文では、仮説が全く検証されていないと、論文が完成しない気分になり先に進まなくなってしまうので、少しずつ結果を積み上げていくといい。

(2) 論文作成

修士論文の作成はゼミを中心に行うことになる。月に数回発表が割り当てられていたので、ゼミで進捗を報告していった。春学期はすでに研究計画書を書いているので、研究計画書を基に研究を進めていった。例えば、先行研究の整理、仮説の導出、データの手作業による収集の進捗度合いなどを報告していった。博士課程への進学ではなく、就職活動を行う場合、なかなか春学期に研究を行う時間を取れないが、少しずつでも進めていると後で楽になるだろう。

夏休みは授業がなく時間が取れるため、主にデータの収集を進めていった。秋学期は夏休みの進捗報告を行った後、論文完成に向けて残っている作業を進めた。秋学期は論文提

出期限が迫ってくるため時間を考えながら、作業をする必要がある。もう少し分析を行いたかったが、時間との兼ね合いでできないものもあった。

ゼミで発表する中で、理解されなかったり誤解されたりする部分が、多くあると思う。その原因は自分の発表や論文にあることが多い。例えば、先行研究の整理が足りず仮説が飛躍している、分析は終わっているが図表がうまく作成できていない、結論の検討が足りなくて、分析結果と乖離してしまっているなどがあげられる。

なお、ゼミでの発表はパワーポイントなどプレゼンテーション・ソフトを用いて行うことが多いが、パワーポイントは箇条書きになってしまうため、説明する際には問題がなくても、文章化する際に不整合が生じてしまうことがある。パワーポイントだけを使うのではなく、普段から文章化してみると不整合が生じている部分があるので、その都度修正することができる。私の場合、仮説をパワーポイントで説明していると問題があまりないような気がしていたが、いざ文章化した段階で、かなり飛躍があり、文章がつながらなくなってしまう、修正に時間がかかってしまった。

(3)データの取得

実際のデータを用いる実証研究の場合には、データを既存のデータベースから取得する必要がある。多くのデータは 11 号館 10 階の商学研究図書室で取得することができる。データベースごとに操作方法が異なっており、日本語化されていないデータベースもあるため、取得に慣れるまで、予想以上の時間がかかる。また他の人が使っている間は、同じデータベースを使うことができない。秋学期以降になるとデータベースの利用者が増えてくるため、夏休みなどに図書館へ行き、早く取得を終わせるほうが良い。

私の場合、利益や売上高といった財務データおよび株価データを取得した。その際、最低限のデータのみ取得すれば早く終わるが、後で取り直しにならないように、できる限り幅広く長い期間のデータを一度にダウンロードするようにしたので、取得に多くの時間を費やしてしまった。

(4)参考文献の検索および整理

日本語の本や論文は図書館に行かないと見ることはできないものも多い。一方、英語の論文は図書館の学術情報検索から論文をオンラインでダウンロードすることができる。そのため、英語の論文は関連ある論文をどんどんダウンロードすることができるが、大量になると整理する必要がある。そこで、文献管理ソフトを使うことが多い。文献管理ソフトは無料のものと有料のものがあり、図書館から案内されているものもある。それぞれ好みがあると思うので、いくつか使ってみて、使いやすいものを選ぶとよいだろう。

文献管理ソフトごとに操作方法是異なるが、ワードなどワープロソフトと連動して本文中で引用した参考文献を自動で文末などに出力することができる。そのため適切に操作が行われていれば、間違えなく文末などに掲載する参考文献リストを作成することができる。しかし、多くの文献管理ソフトは主に英語を想定した設定になっているので、日本語で書く場合には手作業による調整も必要になる。文献管理ソフトが修士論文の参考文献の形式と違ったので手作業による修正作業は大変だった。

(5)時間の使い方とスケジュール

修士課程で順調に単位が取得できている場合、修士 2 年目は多くの時間を論文作成に充てることができる。そのため、余裕をもって論文を完成させることができそうだが、最後はぎりぎりになってしまった。修士論文の提出日は冬休み明けになるが、11 月くらいには初稿を完成させないと、余裕をもって完成しないだろう。修士論文になると分量も多く、例えば参考文献の数も多い。章や節ごとに文章の統一性がないため文章の見直し行う、ま

た参考文献リストの整理を行うだけで、時間を費やしてしまう。実証分析を行っていたため、多くの統計データを論文中で表示しており、見やすいものになるよう、図表の作り替えにも時間がかかった。

1 頁の文字数や行数、文字と図表のフォントとサイズ、参考文献の形式などは修士論文の手引きに目安が掲載されている。細かいところではあるが、直前に修正しようとする、見落としも多くなるので、普段から形式に沿って書くと直前で修正することが少なくて済む。

最後に参考程度に私の修士論文の目次を掲載する。先行研究の整理、仮説の設定、分析モデルと分析結果、まとめという構成になっている。第2章、第3章および第4章で先行研究を整理して、仮説を導出した。第5章、第6章で分析モデルとサンプルの選択基準を説明した。第7章、第8章および第9章では、分析結果を提示した。最後に第10章はまとめとなっている。

<参考>修士論文目次

第1章	はじめに
第2章	会計情報の価値関連性についての先行研究
第3章	人的支出を中心とした無形資産についての先行研究
第4章	人的支出の価値関連性
第5章	分析モデル
第6章	サンプルの選択
第7章	分析結果
第8章	年度で分類した場合の分析
第9章	時価簿価比率で分類した場合の分析
第10章	本論文のまとめと今後の課題
参考文献	